

1月18日（日）主日礼拝レジュメ

「専念すべきこと」 使徒の働き6章1～7節

6章において、ギリシア語を使うユダヤ人とヘブル語を使うユダヤ人の間で問題が起こった。ギリシア語を使うユダヤ人とは、ユダヤ人でありながらパレスチナ以外の場所に住んでいた人たちで、そこからエルサレムに移住して来たと思われる。ヘブル語を使うユダヤ人とギリシア語を使うユダヤ人の間では言葉だけではなく、文化や考え方など様々な違いがある中で常に多少の緊張関係があったのではないか。生まれや育った環境も異なり、また考え方などがあらゆる面で異なっている人たちが集う中で、時には衝突が起こったり、問題も当然出て来る。そのような中で起こった問題とは、ギリシア語を使うユダヤ人の中のやもめたちが毎日の配給でなおざりにされていたということだった。使徒たちはこの問題に対処しようとした。(2節)教会の中で様々な問題が起こるが、一つ一つのことに対して教会はどのように解決のために動いているのか。愛をもって問題にあたるべき。

使徒たちは弟子たち全員を呼び集めて、まず「私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。」と言います。これは、神のことばを語るよりも、やもめたちの配給の問題は大したことではないと言っているのではない。教会において何よりも最優先にされなければならないのは、神のことばだということ。私たちは気をつけなければ神のことばが後回しになって、他のことが優先されてしまう可能性が常にある。神のことばが常に教会の中心にあるか。

食卓の奉仕のために仕える7人が選ばれたが、彼らは「御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たち」であった(3節)御霊と知恵に満ちていた者たちが、配給の問題に対応しようとした。この働きを自分たちの働きとしているところに彼らの謙遜さを見ることができ、そこに彼らが御霊と知恵に満ちて

いたことが現れている。

4節で「私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。」と言います。使徒たちはなぜこのように言ったのか。それは、彼ら自身が疲れ果ててしまわないため。教会の働きや奉仕は、一部の教会員や牧師に負担をかけるようなことがあってはならない。それとともに、使徒たちは、祈りとみことばの奉仕こそ自分たちに対する神様からの召しと考えていた。牧師も教会員一人ひとりも、教会において召しに応じて奉仕をしていく。

7節で「こうして、神のことばはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった。また、祭司たちが大勢、次々と信仰に入った。」とあります。教会の中で神のみことばが第一とされる時に、それがどんどん周りに広がっていく。そして、広まった神のことばを通して、人々は信仰へと導かれる。神のことばと神のことばによる救いは、教会にしかなく、教会しか提供できないもの。神のことばに私たちが生かされ、神のことばが教会のすべての中心となり、神のことばが語られ、神のことばにより救いに導かれる方がさらに起こされますよう祈っていききたい。